

信仰体験を語る

当たり前がつむぐ

供養の糸

大本山光長寺 塔頭西之坊 総代

井口 亘生さん
野秋 稔さん
鈴木 勝博さん

今回は、聞き手を含め四名が話をする
中での対談形式で誌面をお届けしたく思
います。



右より井口総代、住職、野秋総代、鈴木総代

● 本日はお集まりいただきありがとうございます。ざいます。お三方とも長い無上道の読者でありますから、どうか肩ひじ張らず、自由にお話をお聞かせいただければと思います。

野秋 何号か前の無上道誌に、僧侶が拝んでいたら「呪われそう」という女子校生の言葉がありました。何を言っているんだと、感覚で言えば、かえって罰が当たるとかという思いです。とんでもない世の中になりつつあると感じています。

井口 お寺、そして僧侶というのは先祖を供養してくださるところ・人なので、から、本当にありがたいというのが当たり前なはずで。

野秋 僧侶方は、長い修行をされて、なおかつそこで得たことを人さまのために、時間と知識を費やしてくださる、そして

供養もしてくださる訳ですよね。読経中の微動だにしない正座姿、寒行の歩き姿など、本当に感銘を受けます。そんな方に向かって「呪われそう」の言葉が出てくること自体が想像できません。



▲寒行にて

● 寒行と言え、先日後輩の僧侶が、京都の御本山から十日間かけて一人で行脚してきました。そして、最終日に歩いた日鳳院下のお寺(沼津市青野妙泉寺)から、ここ光長寺の御本山まで、約十キロの道のりは絶対忘れないと言ってくれていました。それだけこの土地の信仰は僧侶も感銘を受けるほどありがたいのです。

鈴木 それは嬉しいお言葉ですが、太鼓が鳴っていれば外に出ていくというのは、何かを考える前に自然にしていることです。あまりに当たり前すぎて、今の今まで特別とは考えていませんでした。東京に住んで



▲晋山式にて八品講行脚

いたことがあります。法事などがあれば必ず帰ってきていましたし、どちらかというと、反対にそうしない方が不思議という気持ちでした。

● その感覚こそ、正しく信仰が継承されてきたことだと思います。毎年興隆学林生が街頭唱題行をしているときの、あの驚きの混じった感謝の表情を是非お見せしたいものです。手を合わせる方がたくさん出てきてくれるありがたい気持ちだけでなく、供養という大切なところが根付いていること、そしてやっぱりお題目はありがたいのだと感じさせてくれること、それこそがこの地域のあたたかく、そして力強い信仰の特徴であると思うのです。

野秋 葬儀などでも、案内の来る来ないには関係なく参加していましたし、何なら夫婦で出席するのが当たり前という感覚がありました。もちろん独身のときにも、葬儀に参加した記憶があります。普段から、朝にはほとけさまにお水とお茶

とご飯をお供えして、手を合わせるのが当たり前で、それは兄弟が四人いれば四人それぞれにしていたことです。

井口 先日私の息子が実家に帰ってくる機会がありました。最初に仏間に行ってお線香を上げていました。当然と思って育てたといえはそれまでですかね。

鈴木 そうですね、何の疑問も抱かず、それが当然という環境で育てられました。

● 宗教離れとか、信仰心の薄れというような声をよく耳にしますが、ここ根方街道を中心とする地域は、ご先祖への供養の心や拝む気持ちというものはまだまだ残っているように感じています。ありがたいという思いとともに、一僧侶・一住職、そして無上道の一編集員としては、その原因というか、過程というか、それをきちんと理解し、ときには分析もしながら

次世代につなげていくことが責任でもあり、永遠のテーマであるように思っています。

鈴木 聞いた話ですが、お盆の時期に、僧侶が読経に来るのが見えて、あわてて全く生活していない別棟の玄関を開いて、窓も開けずに読経をしてもらい、僧侶が帰ると、そのまま鍵を閉めておしまい。そんな家もあるそうです。おそらく来年までそのままなのだと思うのです。そういう人は、お寺にもご先祖にも気持ち少し遠いのかなと感じてしまいました。

● 仏壇やご先祖さまと共に生活をしていない、あるいはほったらかしにできる、それが自然とできてしまう感覚が普通になってしまうのは嫌ですね。他の方の見解ですが、畑や土地などはご先祖様から

思います。

鈴木 せっかく保育園、幼稚園もありますし、自然と人が集まってくる場所が佛寺であればなおさら良いことですね。

● 「依法不依人」という言葉があるのですが、この言葉の意味は、人、つまりは僧侶や熱心な信者さんを一番に信じるのではなく、法華経、南無妙法蓮華経の教えにまず依らなくてはいけないと。ただ、その最初のきっかけをつくるのは、やはり南無妙法蓮華経を唱え信じる人が起こす行動なのですよね。

野秋 だから、非常に恐れ多いですが、僧侶方には今まで以上に法話も文章も研鑽していただきたいですね。そして法要や行事にさらに興味を持つ人が増えていく。それは、当たり前前の文化が薄れて

与えられたものですよね。だからこの地域はそれを引き継いだ、ということがより現実的ですし、苦勞もあるでしょうがまずはご先祖に不義理は出来ない、感謝の気持ち、これが一番先に来るのでしょうね。

井口 光長寺で言えば、今は八品講のいわゆる年配の方々の参拝が多いですが、それもちろん良いことで、その中に若い人が増えるように努力をしなくてはいいけないと思います。

野秋 檀信徒に限らず、地元の人がお参りできる機会をつくらなくてはいいけませんよね。そして個人的には、僧侶のファンにならなくてはいいけないとも思っています。そのための一つは法話を聞く場面を増やしてほしいと思っています、それがまた足を運んでくれるチャンスだと

いる今だからこそ強く必要に思うのです。そこで教えていただけること、気付かされるのがたくさんあるのですから。



▲御会式奉納飛龍太鼓



▲西之坊花見会での一コマ

●この地域は長く住まわれているご家庭が多いですね。つまり、若い世代の方との同居、あるいは同じ敷地内で生活をされている家庭が多いのです。生活の中で当たり前という環境をつくることというのは、受け継いできた「常識」をそのまま引き継ぎ、また興味も自然とそちらに移すような、非常に大切な習慣のように思っています。

野秋 若いときは仕事も忙しいし、お寺へ足を向けるのが難しかったときもありますが、今では他のお寺さんをお参りに行くのも楽しみになりました。自然と目的地にお寺さんを選んでいくものですね。井口 私は線香をいつも車に入れてあって、花さえ買えばいつでもお参り出来るようにいつも準備しています。知人のお墓に寄ったときに、トイレをお借りした

のですが、他のお寺に入っても、「ここに位牌堂があるのか」「使いやすいトイレだなあ」と、気づいたら色々な造りとか、お参りする人のことを考えて、お寺を見ていますね、うちの坊もこうしたらいいなど。それだけお寺のことを考えている自分に気づきました。

鈴木 西之坊でも御本山でも新しい催しが増えてきて嬉しいことです。塔頭のお寺に仕えることは御本山にご奉仕することですから、立場が変わっても、出来る限りの力になりたいという気持ちが変わることはありません。

●様々な方法や場面で、今身が仏身に至るまで、よく南無妙法蓮華經を持てるように、ほとけさまご先祖様がはからって下さっているということかと思っています。本日はありがとうございました。

●取材を終えて

大げさに取材という形を取らず、今思うことをありのままに話していただく中で、それぞれがお持ちである信仰、そして寺院への向き合い方を感じることが出来ました。私自身、話を聞いて「そこまではしていなかった」というようなエピソードもありました。この文章が読者の皆様の目に入ったのち、今まで「当たり前」としてないがしろにしてきた大切なものに気づいたり、思い返していただけたら幸いです。その心の動きもまた、南無妙法蓮華經のお題目による功德であることを信じてやみません。

(取材 宮村光明)